

大学図書館司書課程による情報リテラシー教育の可能性：法政大学図書館司書課程の試みから

長谷川, 昭子 / 坂本, 旬 / 菅原, 真悟 / 村上, 郷子 / 丹, 一信

(出版者 / Publisher)

法政大学資格課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学資格課程年報 / 法政大学資格課程年報

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

2012-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014082>

大学図書館司書課程による情報リテラシー教育の可能性

—法政大学図書館司書課程の試みから—

法政大学キャリアデザイン学部教授 坂本 旬
兼任講師 村上郷子、丹一信、長谷川昭子 T・A 菅原真悟

はじめに

情報リテラシーはしばしばコンピュータ・リテラシーと混同されがちだが、二つはまったく異なる概念である。法政大学図書館では情報リテラシーを「自立的で的確な情報の収集・評価・分析・活用・発信の能力」と定義し、学生の情報リテラシー育成を最も重要な任務として位置づけている*。大学図書館が学生の情報リテラシーの育成を目標に掲げ、ゼミサポートやガイダンスなどを通じて、図書館職員による情報リテラシー教育を行っている。こうした事例は日本の大学ではごく一般的なことであるが、本年度、法政大学では、その一部として「レポート作成講座」を図書館司書課程の教員が担うこととなった。

大学生にとって、レポート作成は、学習スキルのもっとも土台にあたると同時に、高校までの学習とは大きく異なるために、大学に入学したばかりの1年生にとってはとりわけ大きな壁となっている。

もちろん、各学部では「基礎ゼミ」などの初年次教育を通して、情報リテラシー教育を行っており、図書館司書課程でも課程の授業を通して情報リテラシー教育を行っている。しかし、今回報告する事例は正課の授業ではなく、正課外教育である。兼任講師がほとんどの司書課程が全学にわたる正課外の情報リテラシー教育に携わる事例はおそらく希有であろう。

このような実践を行うにいたった経緯について、簡単にまとめておきたい。法政大学図書館は2010年度に情報リテラシー教育の一環として、レポート作成講座を開いている。ただし、図書館職員ではなく、外部業者への委託によるものであった。委託業者は大手予備校であり、その内容は情報リテラシー教育というよりは、小論文作成指導を中心としたものであった。

このプログラムは、図書館によると、一年分の予算しか付かなかったため、2011年度については新しくできた学習ステーションに移管された。学習ステーションは本学市ヶ谷キャンパスを中心に、学生の学習活動の支援を目的に2011年4月に発足した組織である。昼休みに行う「宿題ゼミ（現在の名称は「Lステゼミ」）」や職員による「職員トーク」、学生が企画して行う「学生プログラム」等を行っており、「レポート作成講座」も学習支援活動の一環として実施することとなったの

である。

大学教育において、情報リテラシー教育はあらゆる学部教育の土台となるものであり、外部委託ではなく、可能な限り学内で行うことが望ましい。そのため、情報リテラシー教育の専門家ともいべき図書館司書課程に委託されることとなった。このようにして、2011年度については、3キャンパスの「レポート作成講座」を司書課程が引き受けることになったのである。

2010年度に習うならば、前期と後期の2回、2週にわたって2回の講座を開くことになる。震災のため、授業開始時期が一月遅れたこともあり、各キャンパスとも7月上旬に2時限連続で1回ずつ、初級編を行うことをめざした。実施に向けてあらかじめ担当者3人の教員が講座内容を検討し、プレゼンテーション資料の作成を行っている。

しかし、広報期間が一週間と短かったこともあり、3人の担当者全員が市ヶ谷キャンパスのみ実施することにした。3つの講座の参加学生は合計で十人程度であった。その結果を踏まえ、後期は前期と同様に初級講座を11月に3つのキャンパスで実施することにした。また、情報ステーションと検討した結果、一年生向けを重視し、中級講座については、今年度は見送った。

本稿は、3つのキャンパスで「レポート作成講座」を作成した村上郷子、丹一信、長谷川明子3人の教員の実践記録とすべての講座でTAを担当した菅原真悟によるアンケート集計の結果と分析をまとめたものである。上記のように、講座そのものは前期と後期に行っているが、報告は後期の講座を主として書かれている。

なお、このプロジェクトは学習ステーションと協力しながら、2012年度以降も継続していく予定である。また、2012年6月には通信教育部からの依頼により、「レポート作成ガイダンス」として市ヶ谷キャンパス及び福岡で開催することになっている。今回の報告は第一歩となるであろう。本実践記録を今後の取り組みに生かしていきたい。

2. 市ヶ谷キャンパスでの実践

(1) 実施日時と場所、講座の内訳

「レポート作成講座」（初級）は、理論編と実践編の2コマ（90分）で構成されている。市ヶ谷では、前期

1回（2コマ）、後期2回（各2コマ、合計4コマ）実施した。前期は、理論編と実践編の2コマを同日に行なったが、後期は開催日時を理論編と実践編とで分けた。学生にとって1日に2コマ分の時間を確保するのは難しいとの判断からである。

村上が担当した講座の、開催日時と場所、講座の内訳は下記の通りである。

前期

2011年7月11日（月）1時限（理論編）

2011年7月11日（月）2時限（実践編）

実施場所 市ヶ谷キャンパス BT 6階演習室

後期

2011年11月15日（火）1時限（理論編）

2011年11月15日（火）2時限（理論編）

2011年11月22日（火）1時限（実践編）

2011年11月22日（火）2時限（実践編）

実施場所 市ヶ谷キャンパス BT 5階演習室

講座の申し込み・参加した学生は、以下の表の通りである。

		1 限	2 限
前期	7月11日（月）	2(2)	2(2)
後期	11月15日（火）	2(5)	6(8)
	11月22日（火）	2(5)	6(8)

注) () は申込人数

(2) 実施目標・内容の概略

本講座は2コマ構成である。1回目はレポート作成の理論編であり、レポートと作文の違い、レポート作成の手順および構成について解説をした。2回目は実践編であり、文献の検索、引用の方法、文章表現などに関する説明をした後、簡単な文書・語句訂正の演習を行なった。講座では、市ヶ谷・多摩・小金井キャンパスの担当講師3名が作成したレジメを中心に講義をすすめ、補助教材として「模範レポート」の事例を数点用意した。前期・後期の実施目標及び内容の概略は以下の通りである。

①実施目標

- 作文・感想文とレポートの違いを理解する。
- 基本的なレポート作成の手順を理解する。
- 演習を通して、レポート作成に欠かせない考え方やスキル（文章の書き方、引用）を身につける。

②内容の概略（1回目、理論編）

- 作文・感想文とレポートの違い（レジメのスライド2 & 3）
- レポートの種類（レジメのスライド4 & 5）
- レポート作成のステップ（レジメのスライド6～

15)

- 基本的なレポートの構成（レジメのスライド16～20）

③内容の概略（2回目、実践編）

- レポート課題の事例（レジメのスライド22 & 23）
- クリティカル思考の4つのキーワード：論理性、信頼性、独創性・創造性、明快性（レジメのスライド24～41）
- 演習（レジメのスライド42～44）

1回目は理論を中心にした講義である。上記①のaとbの目標を達成するため、導入として「作文とレポートの違い」について、受講生に質問をしながら解説した。次に、「レポートの種類」について簡単に概要を説明し、メインの「レポート作成のステップ」に移った。本題に入る前に、受講生にDVD『情報の達人第3巻・レポート・論文を書こう！ 誰にでも書ける10のステップ』（紀伊國屋書店 2007年）を視聴させた。受講生の多くが学部1・2年生を想定していたことから、レポート作成の手順を視覚によってイメージしてもらうためである。最後に基本的なレポートの構成について解説した後、簡単な文章・語句の訂正問題を行なった。

2回目はレポート作成の実践として、講義と演習を併用した。具体的なレポート課題の事例を提示しながら、それぞれの課題について何をどのように書けばよいのか解説した。次に、クリティカル思考の4つのキーワード、論理性、信頼性、独創性・創造性、明快性について、事例を提示しながら説明した。特に、受講生の「苦手」とする引用の方法、すなわち信頼性の部分については解説に時間をかけた。この部分は、レポートの価値の根幹に関わるものと考えからである。そのほか、文章・語句の訂正問題を行うとともに、受講生との質疑応答を交えながら、「模範レポート」の実例にそってレポート作成の要点を解説した。

実例に基づく解説については、1・2年生が多い場合はレポートの「形式」的なところから説明する必要がある。例えば表紙の書き方、一般的な提出方法、見出しの書き方などである。作文とレポートの違い以前に、名前やテーマを書かない、文章の半分以上がいわゆる「コピペ」、手書きもしくは携帯メールでの提出など、学生によっては基本的なことから教えないと現実があるためである。

(3) 受講生の反応と感想

受講生による講座終了後のアンケートの結果は表2、受講生の「自由記述」は表3の通りである。開講回数については、7人中6人が「増やしてもよい」という回答であった。内容面では、「引用文献の書き方」を除くすべての項目について十分に理解できていない受講生がいた。今後の講座の内容や進め方についての課

題となる。

受講者のアンケート結果によれば、演習にある程度時間が取れた項目（例えば、引用文献、文章構成）については、おおむね理解できたという回答であるが、十分に時間が取れなかった項目については課題が残った。また、自由記述に講座の回数を増やして欲しいとのコメントが散見しており、2コマでは講座の内容を十分に消化しきれていない部分もあることが分かった。学生にとっては、理屈を教えただけでは本当に理解したことにはならない。具体例を提示しながら、実際に自分で考え、調べ、書く時間を確保する必要があると実感した。

(4) 実施後の振り返り

ここでは、主として講座の運用面について気づいたことを3点述べたい。

①実施の時期と時間帯

新1年生にとっては初めてレポートを書くことから、初級レベルの講座の実施時期は前期の6月から7月の間にすることが望ましいと考える。後期は、学生によっては卒論を書く者もいるため、初級レベルだけではなく、中級レベルの講座の開設も望まれるが、これについては④でふれる。

時間帯については、学生が参加しやすい時間帯や曜日を担当教員と調整していくことも大切である。その際、既に受講した学生や司書資格課程の受講者にアンケートをとって、学生が参加しやすい時間帯を把握した上で、担当教員との調整を進める方が効果的であろう。

②実施の頻度

講座内容は、レポート作成の手順、検索、引用の方法、文章表現など多岐にわたるため、講座のレジメを2回で消化するのはかなりきびしい。受講生がレポート書き方を身につけるには、理論（理屈）だけではなく演習の部分を確認する必要がある。そのためにも、開講回数は最低3回確保したい。特に2回目の実践編では、受講生が司書資格課程や図書館のオリエンテーションを受けた者とは限らない。したがって、受講者のレベルによっては検索のイロハからはじめなければならない場合もある。

③広報の工夫

今回は初めての試みでもあり、広報の方法と期間には課題が残った。講座を実施するにあたり、系統的に広報戦略を練る必要がある。具体的には、インターネット、掲示板、紙媒体、授業での紹介といった従来型の広報を継続的に進めるだけでなく、一般の学生やゼミを対象とした図書館、学部学科のオリエンテーションおよびガイダンスの中に、「レポート作成講座」を学習支援の一環として体系的に組み込んでいくことも一案である。そのためには、他の部署や学部学科と

のコミュニケーションと連携が必要になる。また、レポート作成講座では何をするのか、学生にとってどのようなメリットがあるのかがひと目で分かるような情報発信が必要である。

④今後の可能性として：中級レベルの講座開設

現行の初級講座は、学部1・2年生を想定しているため、教える内容が広範囲に及ぶが深めるには限界がある。多様なニーズを持つ学習支援をより充実したものにするためにも、上級生を対象にした中級レベルの開講が望まれる。

中級レベルでは、「文献の検索と収集方法」、「引用の方法」、「文章表現」など特定のテーマについての講義や、実際に学生のレポートを受講生たちとともに批評するゼミ形式の方法も考えられる。内容構成や運用方法については、今後さらにつめていく必要がある。

(村上郷子)

3. 小金井キャンパス

(1) 実施日時と場所、講座の内訳

実施日時

E-1 11月2日 (水) 4時限

E-2 11月16日 (水) 4時限

F-1 11月2日 (水) 5時限

F-2 11月16日 (水) 5時限

実施場所 小金井キャンパス 西館6階第二会議室

参加人数、所属学部、学年

Eクラス 1名 生命科学部 1年生

Fクラス 4名 生命科学部 2年生 1名 1年生 3名

(2) 実施目標・内容の概略

本講座を実施するにあたり、担当者間で確認をした概ねの実施目標は、下記の通りである。

① 90分2コマの講座とする。

② 3キャンパスでの共通のレジメを作成し、用いること。

3キャンパスでの共通のレジメを用いるとはいえ、市ヶ谷、多摩とは異なり、小金井キャンパスは理系学部のキャンパスである。理系学部の学習方法と人文系のそれとを一緒には出来ない。その為、小金井キャンパスでの実施に際しては、市ヶ谷、多摩との整合性を図りつつ、下記を実施目標とした。

レポートと感想文などとの違いや、基本的な構成、レポート作成の為のステップなどを、まずはじめに教える。その上で、理系学部の学習に多い、実験レポートの書き方について触れ、併せて文章法、引用文献について学ぶことを目標とする。

上記を開講前の実施目標としたが、実際に授業を開始してみると、担当者の想定とは異なる受講生の事情が

あった。その為、3キャンパス共通のレジュメを利用しつつも、小金井については、受講生の実状に則して講座を展開することに方針を修正した。

実際に行った内容は概ね下記の通りである。初日に、受講生へアンケートを取りつつ、更に実際にレポートを書く上で困っている事をヒアリングした。そこから浮かび上がったものは、大学でのレポートというものを正しく理解していない事、そしてその背景には、大学での基本的な学習方法が身につけていない為であることが判明した。

具体的には下記の様な点である。

- 実験レポート一つとっても、考察をどの様に書いたら良いのか全くわからない
- 通常のレポートを書く場合でも、参考になる資料を調べて書いた事がない、インターネットで少し調べて書けば良いと思っていた
- 絶対に誰でもA+評価をもらえる定番の書き方があると思込んでいる（これは感覚として、予備校の"誰その数学" "誰その化学"の様なこれさえ書けば大丈夫的な感覚である）
- 極端な例ではあるが、レポートに絵文字を書いて提出したことがある

上記を踏まえて、レジュメの範囲から外れるが、少しでも受講生の利益になるよう下記の内容で授業を行った。

- ①作文や感想文とレポートの違いについて
- ②レポートの種類について
- ③レポート作成のためのステップについて
- ④基本的なレポートの構成について
- ⑤資料の探し方について
- ⑥レポートに必要なもの（クリティカル思考）
- ⑦引用文献、参考文献の書き方
- ⑧基礎的な文章法

初日のヒアリングから、自分自身で調べ→考え→纏め→書く、このプロセスの重要性を認識していないことが判明した為、今回の講座では、これらを認識させることを重視した。

①の段階で、これまで受講生本人は、レポートのつもりで書いたものが、実はレポートには値せず、単なる作文であったことを解説し示した。②のレポートの種類において、市ヶ谷、多摩キャンパスでは取り上げないであろう「実験レポート」について取り上げた。その際、実験レポートの構成にも触れ、「考察」の重要性について解説した。

レポート作成のためのステップについては、共通のレジュメに沿って、説明を行った。この際に実験レポートにおいても、考察の裏付けとなるデータや理論の重要性について解説した。

基本的なレポートの構成については、一般的なレポートの他に実験レポートも取り上げ、下記の構成について解説した（尚、これらは板書による対応であった）

実験レポートの構成

1. 目的（その実験の目的）
2. 理論または原理
3. 実験
4. 実験結果
5. 考察
6. 参考文献、注

事前ヒアリングから、特に考察の書き方がわからない、という受講生の声があり、下記の要点を口頭にて解説している。

「考察」の書き方

- 考察の視点
- 判断の根拠
- 判断の結果

その際に理解を促すため、

「実験の結果、100ccのコップに50ccの水が残った」

これについてどの様に考察するのか…などを解説した。これは後段のクリティカル思考とも関連する事柄である。そもそも、実験レポートとは？ その実験の結果や目的は何か？ その実験に伴う理論は何か？ 同様の実験の文献ではどうなのか？ このようなことを把握していなければ、「考察」は書けない。その把握如何で、「実験の結果、100ccのコップに50ccの水が残った」状態を、「50ccも残った」、「50ccしか残らなかった」、「推測どおり50cc残った」と考えるかの差異につながる。よって事前に文献を調べることの重要性について触れた。

また「面白かった」「難しかった」などは、単なる「感想」にしか過ぎない、「装置が故障のため、うまく動かなかった」は、言い訳である。予想した結果と実験結果との比較や、予想と実験の結果間に相当な差異が生じた場合などは、その原因について考察しなければならない、ことを中心に解説した。

また考察のためにも、資料の探し方は重要である。当該講座では、そこでiPadを各自に授業中貸与し、以下の基本的な文献データベースなどについて、内容や使い方を説明した。

- ◇ OPAC
- ◇ ジャパンナレッジ+
- ◇ 理科年表プレミアム
- ◇ Webcatplus

この資料の探し方についての説明の際に、大学のレポートに於いては、根拠のある情報源を資料として用いなければならないこと、Wikipediaのような情報は不正確であることも多い、ましてや丸写しは論外である、ことなどを絡めながら授業を進めた。

引用文献、参考文献の書き方については、SISTを紹介した上で、実際に理系の図書、雑誌論文（受講生の所属学部に関連した雑誌、洋雑誌も含めて）のコピーを配布し、実際に参考文献リストを書く演習も行った。引用文献、参考文献の書き方やレポートの形式が如何に重要であるかを強調した。

前後したが、基礎的な文章法についても、レジュメに沿って解説を行った。

文章も重要である。理系に於いては、名文ではなく、明文が求められる。これを念頭に文章を書かなければならない。レジュメは一例である。当講座では文章作法のみに時間を費やすことは出来ないで、今後は新聞なども読む様に心掛けて欲しい旨説明し、授業を終了した。

(3) 受講生の反応と感想

初日のヒアリングにより、当初の担当教員が想定していた様式や文章作法、以前の問題を抱えている受講生がほとんどである事が判明したため、出来るだけ大学での学習方法、そして学習に対する意識の変化を促す様につとめた。

しかしながら、前述した様に高校までの学習の影響で有ろうか、何か魔法の様な手法があって、それさえ知っていれば、レポートの内容が不十分であっても、最高評価を得られるものだと、思い込んでいる節があった。

其れ故か、授業の前半は、「レポートというものは、こんなことをして書かなければいけないのか?」「もっと簡単に書けるものだと思っていた」のような反応がみられた。

授業後のアンケート調査から見ると、「引用文献についてあまり意識していなかったため勉強になった」「自分の間違いがある程度理解できた」「資料集めのやり方を教えてくれたおかげで、これからに生かせようである」のコメントも見え、レポート作成についての理解は得られた様である。2日目の授業中に、幾度か受講生の驚くような反応が見られた場面があったことから、多少なりとも、受講生のそれまで抱いていたレポートについての誤解を解く良い機会になったようである。

(4) 実施後の振り返り

今回のレポート作成講座は、担当教員にとって小金井キャンパスではじめての講義である。学生の様子を伺う上でも、参考になったことをまず申し上げたい。

本講座を実施して、気づいたことは以下の点である。

①実施時期と時間設定について

今回の小金井での参加者は全て同一学部の学生であり、少人数であった。多くの参加を促す為には、もう少し周知期間を長くする必要がある。また理系キャンパスの場合、学部により授業と重なるため出席出来ない時間帯が明確になっていることが多い。次回からは、学部の必修科目を避けて、学部ごとに比較的履修しやすい時間帯を選択する必要があると考えられる。

また実施時期については、初級レベルについては、前期に行うことが望ましいと考えられる。これは1年生については、レポート作成もさることながら、大学での学習指導にも少なからずつながる為である。

②内容の構成について

1年生、2年生が主体であるならば、まず最初に大学における学習方法の説明、解説からはじめることも考慮せざるを得ない。既に高校までの間に、コピーで済ませる習慣ができてしまっている学生の意識を変える必要がある。そのためには、「考える」という事が、どのようにすべき事なのかを教える事から始めなければならないであろう。その点からも、初級レベルについては、まず意識の変革から入る内容に修正する必要がある。文章作法、参考文献の記述法などは、その後の段階である。来年度に向けて再考したい。

③今後の展開について

今回は1年生が主で、かつ少人数であった。今後、さらに小金井で発展させて行く為には下記を検討する必要があると考えられる。

- 初級だけではなく、中級も必ず開講する必要がある。理系の場合、3～4年時は、論文を読みこなして研究活動に入る必要がある。そのためには、本格的に各種学術データベースの使いこなしが必須である。これなくして文章作法のみ学んでも意味はない。よって、初級はあくまでも大学での学習の初歩を教えて、中級以上で、卒論などへの対応にはいる事が望ましい。
- 中級はかならずしも、初級の受講者に限る必要はない
基礎的なレポート作成の技法が身につけていけば、初級履修者に限る必要はないと考えられる。
- 中級は学部ごとの設定で。
中級以上で用いるデータベースは、学部ごとに異なる。例えば、化学では、Chemical AbstractsやBeilstein databaseなどが中心となるが、電気・電子工学はIEEEなどであり相当異なる。適切な授業のためにも、学部ごと、研究分野ごとのレポート作成講座が望ましいと考えられる。種々の制約はあると考えられるが、検討の必要性を実感した良い機会であった。

(丹一信)

4. 多摩キャンパスでの実践

(1) 実施日時と場所、講座の内訳

①実施日時と場所、教室

多摩では当初、前期と後期の年2回の開催予定であったが、前期は受講生が集まらない可能性があるとの判断から実施を見送り、後期のみで開催となった。開催日時と場所は下記の通りである。

2011年11月14日(月)4時限
2011年11月14日(月)5時限
2011年11月21日(月)4時限
2011年11月21日(月)5時限
実施会場 多摩キャンパス総合棟4階第3会議室

②参加者数

講座の申し込み・参加した学生は、以下の表の通りである。

		4限	5限
1回目	11月14日(月)	5(5)	3(5)
2回目	11月21日(月)	3(6)	2(4)

注) () 内は申し込み人数

1回目の参加者8名の内訳は、1年生6名、2年生2名で、所属学部は社会学部6名、経済学部2名であった。

(2) 実施目標・内容の概略

1回目はレポートとはどういうものかを理解してもらうことを目標とし、2回目は具体的なレポートの書き方に主眼を置いた。詳細は下記のとおりである。

①11月14日(1回目)

・作文・感想文とレポートの違い

作文・感想文は自分の体験や思いを語るものに対して、レポートは事実(証拠をあげて裏付けすることのできるもの)と意見(単なる主観的判断ではなく根拠に基づくもの)を記すものであることを説明した。

・レポート作成の手順

まず、DVD『情報の達人第3巻・レポート・論文を書こう! 誰にでも書ける10のステップ』(紀伊國屋書店、2007年)を視聴し、その後10のステップそれぞれについて詳説した。特に関連文献の調査・入手・読み込みのステップが重要であること、ここに時間をかければかけるほど質の高いレポートになることを解説した。この説明は、2回目の関連文献の調査・入手についての伏線である。

・レポートの構成

序論、本論、結論という基本的なレポートの構成についてまず説明し、次いで、レポートの実例を示しな

がら具体的にどのような順序で、どのような表現を用いて展開しているのかを受講生と共に確認した。最後に、段落ごとに順番をバラバラにした小レポートを正しい順序に並べ直す演習を行った。

②11月21日(2回目)

・関連文献の調査

レポートのテーマ、つまり主題に関する文献を探す方法を、図書、雑誌、統計調査・報告書別に解説した。受講生はノートパソコンを用い、実例に基づきながら、NDL-OPACの一般書誌、同雑誌記事索引、e-Stat政府統計を検索して求める文献を探した。特に、NDL-OPACの一般書誌検索では、件名を用いた効率的な検索方法についても解説した。

・関連文献の入手

上記で得た情報をもとに、その文献の所在を調べる方法を解説した。まず本学図書館のOPACの使い方を説明し、次いでNACSIS-CATを紹介した。本学図書館で所蔵していない場合は、他の図書館から借り受けたり、必要部分の複写を取り寄せたりできることを説明し。いずれの場合も図書館に相談するよう補説した。

・執筆時の注意点

レポートには、クリティカル思考が重要であることを説明し、(1)論理性、(2)信頼性、(3)独創性・創造性、(4)明快性の四点が必要であることを解説した。中でも(2)に関しては、引用した場合は必ず出典を明記すること、およびその方法について詳説し、(4)については学生のレポートで問題が多数見られることから、特に次の点について具体例に基づいて演習した。文章は読みやすく、体言止めは使わない、あいまいな表現は避ける、修飾語は修飾される語の近くに置くなどである。

(3) 受講生の反応と感想

2回目の講座終了後のアンケートの結果は次の表のとおりである。

受講生	回数	手順	構成	文献収集	引用文献	文章表現	目的達成
1	適当	分かった	分かった	分かった	少し分かった	分かった	達成できた
2	増やしてもよい	少し分かった	少し分かった	少し分かった	少し分かった	分かった	少し達成できた
3	増やしてもよい	分かった	分かった	少し分かった	分かった	分かった	達成できた
4	適当	分かった	分かった	分かった	分かった	分かった	達成できた
5	増やしてもよい	分かった	少し分かった	分かった	分かった	分かった	少し達成できた

人数が少ないため、大まかな傾向を捉えるにとどめるが、回数は「増やしてもよい」という意見の方が「適当」という意見より多い。講座の内容に関しては、「文章表現」については全員よく理解していたが、「レポートの構成」「文献収集」「引用文献の書き方」については、十分理解できなかった者もいることが分かった。最終

的な「達成度」に関しても同様である。これらの項目に関して教材の選び方、説明の方法、時間配分に今後検討が必要である。

なお、自由記述は次の三点である。

- ・教室寒かったです（笑）わかりやすかったです。
- ・非常に丁寧に教えて下さって分かりやすかったです。まだ1年生なのでこれから活用していきたいと思います。
- ・資料集めの方法がとても役立ちそうです。是非これからのレポート作成に活かしたいと思います。ありがとうございました。

(4) 実施後の振り返り

ここではレポート講座を振り返り、運営面および内容面について今後の課題を述べたい。

運営面についての課題は、次の四点である。

一点目は、開催時期についてである。多摩では、今年度は後期のみで開催となったが、レポートは当然ながら前期にも課される。開催時期は、前期の方がむしろ必要性が高いとも言える。来年度は、年2回の開催を前提に、時期はレポート提出締切前、つまり前期では7月、後期では11～12月の実施が相応しいと考える。

二点目は、開催時限についてである。今年度は月曜4時限のコースと、同5時限のコースの二つが設けられた。受講生は同一時限で2週続けて計2回受講する。11月の多摩は寒く、しかも5時限目の終わる18時20分は、外は真っ暗になる。学生の中には、時間帯の遅さから受講を躊躇したり断念したりした者もいたのではないかと推察される。今後は、3時限と4時限のコース、あるいは曜日を変えて4時限のコースを二つ設けるなど、早い時間帯の開催が望まれる。

三点目は、講座の回数についてである。今年度、講座は2回に分けて行われたが、2回ではかなり詰め込み式となり、受講生各人が講義の内容を十分に咀嚼して知識や技術を体得するには、時間が不足である。担当者として、レポートの構成や文献収集の方法は、もう少し時間を割いて説明したいと思った。上記の受講生の感想を見ても、同じ箇所でも理解が十分でなかったという意見が見られる。理解を深めるためには実際に自分で手や目を使って、「考え、調べ、探し、確かめる」過程が重要になる。講座にはそうした時間が不可欠であり、そのためにも回数は3回（3コマ）設けることが望ましい。これについては後でも触れる。

四点目は、学内の協力体制についてである。講座開催について多摩キャンパスの関連部署に十分に周知されていないのではないかという思いを何度かした。例えば、教員用のパソコンを情報センターから借り受けの際には講座そのものの説明からしなければならな

かった。責任の所在も不明確で、配布資料については、講座開始時に用意されていないことに気がつき慌ててTAが印刷したという経緯がある。本講座は、学生の学習支援のための全学的な取り組みである。講座を円滑に進めるため、多摩キャンパスにも実施の拠点となる窓口を設け、担当教員が相談したり、手助けしたりしてもらえる体制を整備していくことが必要であると思う。これは課題というより、希望である。

続いて内容面の課題は次の二点である。一点目は講座の全体の構成に関してである。前述したように、講座では演習のための時間を十分にとることができなかった。例えば、1回目の最後に行った、段落順をバラバラにした文章の並べ直しは、時間が十分に取れなかった。受講生には宿題とし、2回目の最初に説明をしたが、本来であれば学習した後に演習を配した方が効果的だったろう。また、2回目の執筆時の注意点の説明では、最後に文章の誤りを正す「間違い探し」の演習準備をしていたが、時間が足りずできなかった。論理的で信頼のおける明快な文章は一朝一夕に書けるものではなく、実際に何度も書いてみることで誤りに気づき、正確な文章が書けるようになる。その意味で、この演習ができなかったのは残念である。

講座で解説する内容は、絞ったとしてもかなり広範囲にわたる。知識や技術を自分のものとして取り込むためには、演習が重要であり、そのための十分な時間が必要である。これを実現するためには、2回の講座を3回に増やすことが考えられる。3回になった場合は、今回できなかった演習を行うこともでき、また調査した文献を実際に図書館に赴いて探し、閲覧することもできる。さらに、参考図書や統計資料などの所在を実際に見て確認することもできるだろう。上記の「文献収集」について理解が十分でなかったという感想も、この方法によって幾分か改善できるだろう。

3回になった場合の講座の構成（案）は次のとおりである。

- ・1回目 レポートとは何か：作文・感想文とレポートの違い、レポート作成の手順、レポートの構成
- ・2回目 関連文献をさがす：主題調査、所在調査
- ・3回目 レポートを書く：執筆時の注意点

二点目は、iPadの活用である。今年度は、諸般の事情により、市ヶ谷キャンパスからiPad10台を搬送することができず、社会学部より借り受けたノートパソコンを使用した。しかし、司書課程では昨年度よりiPadを活用した授業の開発を行っており、講座はこのiPadを活用できるよい機会である。本学では全学的な情報リテラシー教育の実践を目標としている。新しい情報端末としてiPadを講座にも積極的に活用していきたいと思っている。

（長谷川昭子）

5. アンケートによる分析

(1) レポート作成講座前アンケート

①対象

11月に3キャンパスで開講したレポート作成講座では、まず、1回目の授業の時にアンケートを取り、どのような経緯でこの講座を知ったのか、レポート作成講座を履修しようと思った理由、本講座に期待していることを聞いた。このアンケートに回答したのは、市ヶ谷7名、多摩8名、小金井5名であった。受講生の学年は3キャンパスあわせて、1年生15名、2年生3名、3年生1名、4年生1名の合計20名である。受講生の大多数が1年生であった理由は、本講座の名称が「レポート作成講座～初級～」であり、講座案内のちらしにも「1・2年生でレポートを初めて作成する学生やレポートをうまく作成できないと悩んでいる学生は、ぜひこの機会にレポート作成の手法を身につけましょう！」と宣伝したことが理由であると考えられる。

②講座前アンケート結果

最初に、この講座を知ったきっかけを聞いた。半数以上の11人が「学習ステーションのちらし」で本講座を知ったと回答した。

学習ステーションのちらし	11
法政大学のWeb	5
司書課程の授業	1
HULiC	0
Facebook	0
Twitter	0
その他	3

表1 講座を知ったきっかけ (名)

次に、「授業のレポート作成で悩んだことや、困ったことはありますか？」の問いに、20人中19人がレポート作成で困ったことがあったと回答した。困ったことがないと回答した学生は、1年生で前期にレポート課題がなかったためにまだレポートを書いたことがないと述べていた学生であると考えられる。

「どうすればよい評価になるか分からない」と回答した学生が14人と最も多く、次に多かったのは「何を書いたらよいのかアイデアが出てこない」「レポートの構成がまとまらない」であった。「そもそもレポートと

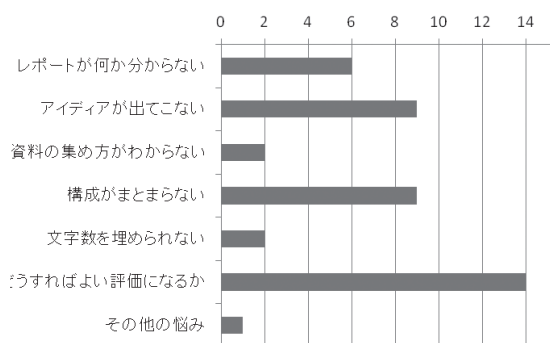


図1 レポート作成で悩んだこと (複数回答可) [名]

は何か分からない」と回答した学生も6名いた。「レポート作成のための資料の集め方がわからない」「指定の文字数を埋められない」と回答した学生はそれぞれ2名と少なかった。

本講座について期待することを自由記述させたところ、次のような回答があった。

- ・教授から高い評価を得られる為のコツとは (小金井)
- ・レポートを書く際に考察があまりうまく書けず、評価はA～Bが多い。A+を取ったこともあるがA+評価になるには (小金井)
- ・社会に出て、プレゼンするようなことがあった時に通用するようなレポートの作成能力がほしい。(小金井)
- ・考察とはどのようなことを書けば良いのか分からない。具体的にどのような点に気をつければ、評価されるのか。(小金井)
- ・私は留学生なので大学に入って、感想文やレポートなどの課題に困っています。感想文とレポートの違い、またレポートの構成をこの講座を通して理解を深めていきたいです。(市ヶ谷)
- ・そもそもレポートとは何かあまり良く分からないので、教えていただきたいなと思って参加しました。(市ヶ谷)

③講座前アンケートの考察

学生が授業レポートで悩んでいることで最も回答が多かったのは、「どうすればよい評価になるのか分からない」であった。この理由としては次の2点が考えられる。まず、大学生が高校までの作文の延長としてレポートをとらえており、レポートの書き方についての基本的な知識がないことが考えられる。2点目としては、教員がレポートをどのような観点でどのように評価するのか具体的に明示しないことや、学生が提出したレポートを教員がチェックしてフィードバックすることが十分に行われていないことも、学生がどうすれば評価されるレポートが書けるのか分からないと回答した背景にあると推測できる。

また、筆者らの予想に反して、資料集めに困ったことがあると回答した学生は少なかった(2名)が、逆にレポートを書くためのアイデアが出てこないという回答が多かった(9名)。学生がレポート作成のための資料探しで困っていない理由は、そもそも関連文献や資料を深く探していないことが理由であると思われる。なぜならば、多摩キャンパスと小金井キャンパスで法政大学図書館のWebサイトから利用できるOPACやデータベースを中心に実習を行ったが、学生たちはそれらを日常的に利用している様子はなく、資料を調べるときはネットで検索して調べていると回答していたからだ。レポートを作成するための関連文献・資料を深く調べないことが背景にあるので、レポート作成のための資料集めで困ったことがないという回答につ

ながっていると思われ、そのような関連文献を読み込むことがないことが、レポートのアイディアが出てこないという回答の原因の一つになっているとも考えられる。情報検索ガイダンスと、レポート作成講座の連携は、今後の課題の一つであると言えるだろう。

(2) レポート作成講座後アンケート

①対象

2コマだけで完結したレポート作成講座であったが、受講生の感想と、今後の運用に関する課題を明らかにするために講座後にもアンケートを行った。アンケート回答者は、2回目の講座に出席した、市ヶ谷7人、多摩5名、小金井5名の、合計17名である。

②講座後アンケート結果

最初の「この講座の講義数(90分2回)は適当だと思いますか?」の問いには、「増やしてもよいと思う」と答えた学生は11人、「適当だと思う」と答えた学生は6人であった。逆に「減らしてもよいと思う」と回答した学生はいなかった。3分の2の学生は2回の講座ではもの足りないと感じていることが分かった。

増やしてもよいと思う	11
適当だと思う	6
減らしてもよいと思う	0

表2 講座の回数は妥当だと思うか(名)

授業であつかった、「レポート作成の手順」「レポートの構成」「レポート作成のための資料集めの方法」「引用文献の書き方」「文章表現など執筆上の注意点」について、それぞれ4件法で(1. 分かった, 2. 少し分かった, 3. あまり分からなかった, 4. まだ分からない)で聞いた。結果は表1の通りである。5つ全ての項目で「分かった」と回答した学生が最も多い結果となった。

	分かった	少し分かった	あまり分からなかった	まだ分からない
手順	11	6	0	0
構成	11	5	1	0
資料集め	12	4	1	0
引用文献	14	3	0	0
文章表現	13	3	1	0

表3 講座の理解についての回答(名)

次に、この講座を受講した目的を達成できたかの問いには、「達成できた」が9人、「少し達成できた」が8人、「あまり達成できなかった」「できなかった」は0人であった。

最後に、受講して良かったこと、よく理解できなかったこと、要望などを自由記述させた。学生からは次のような回答が寄せられた。

・非常に丁寧に教えて下さって分かりやすかったです。まだ1年生なのでこれから活用していきたいと思ます(多摩)

- ・資料集めの方法がとても役立ちそうです。是非これからのレポート作成に活かしたいと思います。(多摩)
- ・引用文献についてあまり意識していなかったため、勉強になった。また、自分の間違いがある程度理解できた。(小金井)
- ・資料集めのやり方を教えてくれたおかげで、これからのレポートに生かせそうです。(小金井)
- ・もっと回数が多くてもよかった。(小金井)
- ・細かく指導していただき本当に分かりやすかったです。もっとたくさん講座を開いていただきたいです。(市ヶ谷)
- ・2回だけの講座は少なかったと思ったので、4回くらいにわけ、じっくり行った方がよりよくできるのではないかと思います。(市ヶ谷)
- ・レポート講習会に初めて参加して、2回ともすごくためになるものでした。ありがとうございました。添削とか可能であれば今度してほしいです。(市ヶ谷)
- ・年に数回(2回ぐらい)の間隔で開催してほしい。(市ヶ谷)

②講座後アンケートの分析

講座後のアンケートでは、最初に2コマで十分だと思うかを聞いた。その結果、3分の2にあたる11人が講座数を増やしてもよいと思うと回答していた。今回の講座は90分2コマだけの授業時間に、レポートと感想文・作文の違いの説明から、レポート作成の手順・構成・資料集め・引用文献・文章表現までを詰め込んだ内容となっているために、説明が早足になってしまったことが理由であると思われる。少なくとも3,4回のコマは確保して行う必要があると考えている。

授業で扱った項目(手順・構成・資料集め・引用文献・文章表現)については、すべての項目で「分かった」という回答が最も多かったことや、レポート作成講座を履修した目的は達成できたかという問いも、「達成できた」が9人、「少し達成できた」が8人であったことから学生は、レポート作成講座を受講したことを肯定的にとらえていることが分かる。

自由記述をみると、もっと講座を増やしてほしいという回答や、レポートを実際に添削してほしいという回答もあった。コマを増やすことや、レポートの添削などを行うことは今後の課題であると言えるだろう。

(3) キャンパスごとの講座内容の違い

本年度実施したレポート作成講座は、講座を担当する3講師が中心になって扱う内容を統一させようと、共通のプレゼンテーション資料を作成した。しかし、実際に授業を行う過程では、スライドをベースに授業が行われたが、担当講師の判断で授業内容をカスタマイズして行った。それぞれの講座内容は、各講師がまとめた報告の通りであるが、異なっていた点を分かり

やすくまとめたのが表2である。

たとえば『情報の達人第3巻: レポート・論文を書こう! 誰にでも書ける10のステップ』(紀伊國屋書店2007年)については、小金井キャンパスでは上映せず、多摩では要点を述べている部分を数分見せるのにとどめたが、市ヶ谷キャンパスでは第3巻のすべてを上映した。情報検索演習については、市ヶ谷キャンパスでは口頭で説明するだけだったが、多摩・小金井キャンパスでは実際にノートPCやiPadを使って検索実習を行った。検索実習の内容は、多摩は社会学部系の学生が多いことを考慮してe-statの説明、小金井は理系の学生が多いことから理科年表を紹介をするなど、各講師が講座の進捗・各キャンパスの実態に合わせてカスタマイズした。

どこまで、講座の内容を統一させるか、キャンパス・学部ごとに内容のバリエーションをどのように構築していくのか、改めてレポート作成講座で扱う内容をリスト化し、講座の内容を吟味する必要もあるだろう。

なお、小金井キャンパスでは、検索実習のためにiPadを活用した(写真1)が、iPadのような情報機器に必要な資料等を入れておけば、どの教室でも簡単にレポート作成講座や情報検索実習に活用できることも分かってきた。iPadなどの情報端末の活用は今後の課題の一つであると言える。

	市ヶ谷	多摩	小金井
情報の達人第3巻	1巻すべてを上映	ダイジェスト部分を数分上映	上映なし
情報検索実習 (・使ったデータベースやサイト)	実施せず	ノートPCで実施 ・NDL-OPAC ・e-stat ・法政OPAC ・NACSIS-WEBCAT	iPadで実施 ・法政OPAC ・ジャパンナレッジ+ ・理科年表プレミアム ・Webcatplus
模範となるレポートの紹介 他の授業の学生レポートを紹介	他の授業の学生レポートを紹介	師が作った見本レポートを紹介	生物系の論文を紹介
参考文献の書き方	スライドでの説明	スライドでの説明	SISTを使って参考文献の書き方を実習

表4 キャンパスごとで内容が異なった点



写真1 iPadを使った情報検索実習の様子

(4) レポート作成講座の成果と課題

今回のレポート作成講座の成果は、共通のカリキュラムとパワーポイント資料を作ったことで、3キャンパスのどの講座を履修した学生であっても、レポート作成に関する基本的な事項についての理解を深めることができたことである。さらに、どのキャンパスでも学生の満足度も同様に高かったことも成果の一つにあげることができるだろう。

しかし、今回の講座は2コマと回数が少なく、コマ数をもっと増やしてほしいという学生の要望も出てきた。また、これまでも図書館による情報検索ガイダンスや、基礎ゼミ等でレポート作成についてさまざまな取組が行われてきたが、学生の情報リテラシー(レポート作成能力)は十分に習得されていないことも分かった。レポート作成講座の広報の問題とも関係するが、こういった講座を行っていることをさらに周知させながら、受講生を増やしていきたい。

さらに、今後の発展的展開を行うにあたって、検討すべき課題として、次の3点をあげることができるだろう。

①法政大学生向けレポート作成ガイドブックの作成

まず、レポート作成に関して大学生であれば知っておくべきことと、文系・理系等の学部ごとに異なる内容を分けて分類した、レポート作成のガイドとなるテキストがあるとよいだろう。そこにて、学生がレポート作成の際に使う、法政大学図書館OPACや各種データベースの使い方、さらに、エチュードなどのLMSの活用方法も載せておくと、学生のレポート作成の支援となるであろう。出版にはコストがかかるが、電子教材の形で学内の配布を行うことで、コストを削減することも可能である。

②段階ごとのレポート作成講座の実施

今回の取り組みでは、初級講座のみを実施したが、中級・上級と段階的な講座の開設が必要になるだろう。たとえば、初級編では大学生であれば誰もが知っておくべき共通の内容を、中級編では、学部学科に即したレポート作成講座を開講するのがより学生のニーズに適していると考えられる。さらに上級編では、卒業論文や法政大学投稿論文などを視野に入れた論文の書き方についての講座を行うことができるだろう。

③他の実践とのコラボレーション

実際の授業では、エチュード等の各種学習支援システムや図書館のOPAC・データベースなどを使いながらレポートを作成していくことになる。レポートを書く方法だけではなく、学内のシステムとの連動を視野に入れたレポート作成講座の運営も検討すべき課題であると考えている。

(菅原真悟)